

## 申し送り短縮に対する意識の改革

13階西 ○平林千妹 小田

### I はじめに

近年、看護業務の効率化・患者中心の看護を考  
 える中で、申し送りは常に問題とされ、口頭での申し送  
 り（以下申し送りとする）時間の短縮や廃止に取り組  
 む施設が増えてきている。國岡<sup>1)</sup>は、「申し送りは情  
 報伝達の手段として行われているが、看護業務を行  
 う上で時間的損失となり、時間外労働の大きな原因  
 となり、ひいてはこれらによって起きる看護婦のベ  
 ットサイドケアの不十分感が生じる。」といってい  
 る。

当病棟でも平成12年度より適切な業務配分をして  
 超過勤務をなくすこと、看護の責任を果たし主体的  
 な看護ケアをめざすことを目的とし、申し送りの短  
 縮に取り組んできた。しかし、結果として時間・内容  
 共に著しい変化はみられなかった。そこでまず、スタ  
 ッフの申し送りに対する意識調査を行い、結果とし  
 て申し送り短縮への意識の改革が行えたのでここに  
 報告する。

### II 研究方法

1. 調査期間：平成13年9月20日～10月10日
2. 調査対象：13階西看護婦19名
3. 調査方法：
  - (1) 13階西看護婦無記名質問紙調査
  - (2) 勉強会として申し送り短縮・廃止について  
 書かれた文献の内容を、方法・看護方式・メ  
 リット・デメリットに分類し一覧表を提示  
 し、説明した。
  - (3) (2)をふまえ再度13階西看護婦無記名質問紙  
 調査

### III 結果

1. 看護婦経験年数については1・2・4・5年目いづれ  
 も3名、3年目5名、7年目2名である。(図1)
2. 当病棟で申し送り短縮実施を知っているかとの  
 問いに95%がはいと答え、実際に心がけているか  
 との問いには約60%以上の看護婦が、あまり心が  
 けていない・どちらともいえないと答えている。  
 (図2・3)
3. 適当な申し送り時間については図5・6のとおり  
 で、一日平均すると勉強会前は41.5分なのに対し、  
 勉強会後は31.2分となっている。
4. 申し送り短縮に賛成かとの問いには、勉強会前  
 は78%の看護婦がはいと答えその理由として、仕

事に早く取り組める(8名)、記録に記載してある  
 ことを口頭で送るのは無意味(6名)、精神的に余  
 裕が持てる(2名)、という回答が得られた。(表1)

勉強会後においては95%の看護婦が賛成と答  
 え、勉強会前の理由のほかに、デメリットよりメ  
 リットが多い(9名)、文献のメリット欄に共感(5  
 名)と、勉強会の「申し送りのメリット・デメリッ  
 トを理解してもらおう」という目的を果たした結果  
 といえよう。(図8・表5)

5. どうしたら申し送り短縮が徹底できるかとの問  
 いには、看護記録の充実(8名)、申し送る内容を  
 決める(7名)、スタッフの意識を高める(6名)、  
 連絡ノートなど作成し情報交換の場をもうける  
 (3名)、重症患者のみ申し送る(1名)、カーデッ  
 クスを使用しない(1名)などの意見が上がった。  
 (表6)

### IV 考察

#### 1. 勉強会前のアンケート結果

病棟において申し送り短縮実施を知っている  
 かとの問いには、ほぼ全員の95%が知っている  
 と答えている。しかし、申し送り短縮を心がけてい  
 るかとの問いにはほぼ心がけている、常に心がけ  
 ていると答えたのは37%にとどまり、どちらとも  
 言えないと答えたのが52%と半数であった。申し  
 送り時間においても過半数の56%が長いと答え  
 ており(図4)、適当な申し送り時間はどの位か  
 との問いには、一日平均41.5分と答えているが、実  
 際には約60分以上、(夜勤から日勤へは約25分、日  
 勤から中勤・中勤から夜勤へは各約20分)費やし  
 ている現状がある。これは、申し送り短縮に賛成  
 している看護婦が84%と高値なのに対し矛盾が  
 あると言える。

送り手の意識として、どこまで送ればよいのか  
 不安、口頭で送ったほうが安心などの意見が挙げ  
 られた。これは、全て一通り申し送るというパタ  
 ーン化された申し送りが習慣化していると考え  
 られる。

また、受け手としては、口頭で送られないため  
 不安を感じる、観察ポイントを見逃してしまうの  
 ではないかなど「申し送りを聞く」という受身の  
 姿勢・意識が看護婦間に強くあるということが  
 挙げられる。その理由として、申し送り前に記録  
 が十分に書けていない現状や、記録に記載されず

でに情報を得ていることについても申し送ってもらいたいということが考えられる。これらは、申し送り短縮実施が妨げられている大きな原因でもあると言える。

## 2. 勉強会後のアンケート結果

勉強会に出席して申し送りの短縮のメリットが理解できたかの問いには100%の看護婦が理解できたと答えている(図7)。そして、今後申し送り短縮を常に心がけようと思う看護婦は74%と高値であり勉強会前後で69%アップしている。また申し送り短縮を病棟で徹底することに対して賛成かとの問いには95%の看護婦が賛成している。これより、勉強会により申し送り短縮の必要性・メリットがスタッフに十分に理解され、申し送り短縮に対する意識改革が行えたと言える。賛成の理由として申し送り短縮実施はデメリットよりメリットが多い、文献のメリット内容、特に自ら判断する力がつく、看護婦としての責任感がもてるという内容に共感したという意見が多かった。これは、申し送りで情報を得るという受身の姿勢から、情報は自ら得ていくという積極的な姿勢を身につけたいという考えが変化した現れではないかと考える。千田<sup>2)</sup>は、「申し送りの改善は否応なしに自身の力で情報を収集しなければならず、看護婦の自己成長を助ける手段である。」と述べている。申し送りを短縮することで、看護婦一人一人が個々に責任を自覚し、正しい情報を自らの手で得ることができ、ひいては自己の成長が遂げられると言えよう。

しかし、今後の課題として申し送りを短縮する上での看護記録の充実、病棟での口頭レポート規定を作成する、情報収集時間の確保などの必要性があると考えられる。

## V 結論

1. 申し送り短縮実施についてはほぼ全員認識しているものの、実際心がけているスタッフが約半数であった事から意識の低さが明らかとなった。

2. 口頭で全てを申し送るという習慣化された業務に依存する傾向にあるため、申し送り短縮が図れなかった。
3. 勉強会を実施し、スタッフの申し送り短縮への意欲が高まった。
4. 看護記録の充実、病棟での口頭レポート規定を作成する、情報収集時間の確保などで申し送り短縮を徹底させることができ得る。

## VI 終わりに

今回の研究は申し送り廃止へのワンステップであり、看護記録の充実や口頭レポート規定の作成など今後課題が残る。

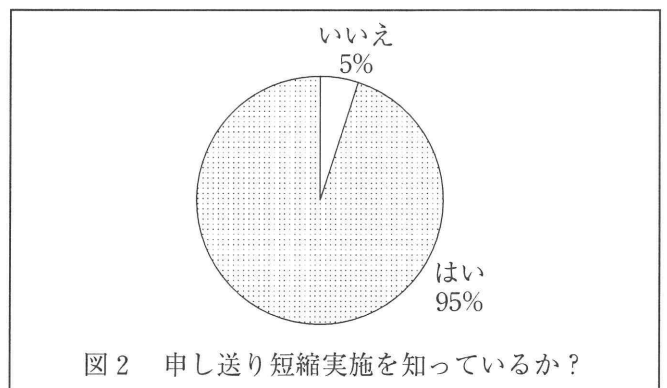
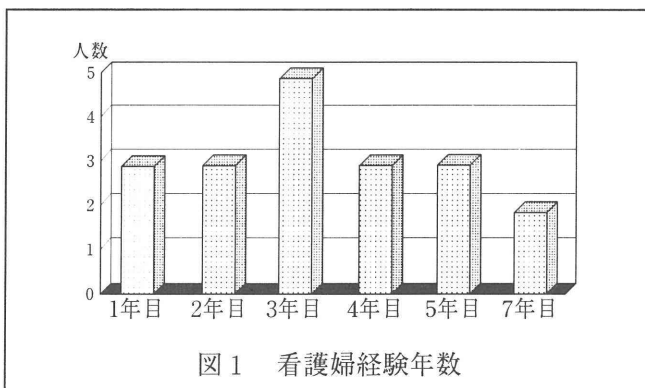
また、継続の手段として随時意識化を図らないと徐々に以前の形態に戻っていく傾向にあるため、今後も検討を重ね有効な展開が得られるよう追求していきたいと思う。

今回この研究をまとめるにあたり、御協力いただいた13階西スタッフの皆様へ感謝いたします。

## VII 引用・参考文献

- 1) 國岡照子：申し送りの意味と定義，看護実践の科学，vol.26，p31～36，1997
- 2) 千田敏恵：安全性から見た申し送りの簡略化と看護記録，看護実践の科学，vol.16，p24～31，1991
- 3) 板橋イク子：看護婦の意識改革をもたらした申し送り廃止，看護展望，vol.21，p96～103，1996
- 4) 塚本正子：良質なケアの提供と申し送り廃止，看護実践の科学，vol.1，p30～35，1997
- 5) 若林夕香里：看護における情報管理，看護実践の科学，vol.1，p24～29，1997
- 6) 多田恵美子：固定チームナーシング導入と申し送りの廃止，看護実践の科学，vol.26，p31～36，2001
- 7) 川島登志子：申し送り時間の短縮をはかる看護ワークシートの活用，看護実践の科学，vol.26，p37～42，2001

勉強会前アンケート結果



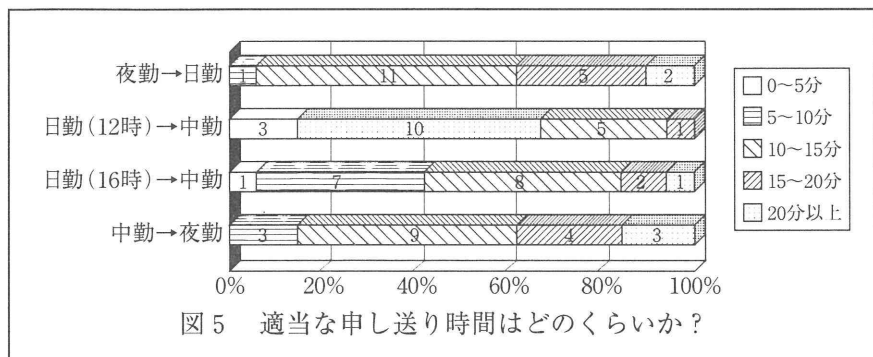
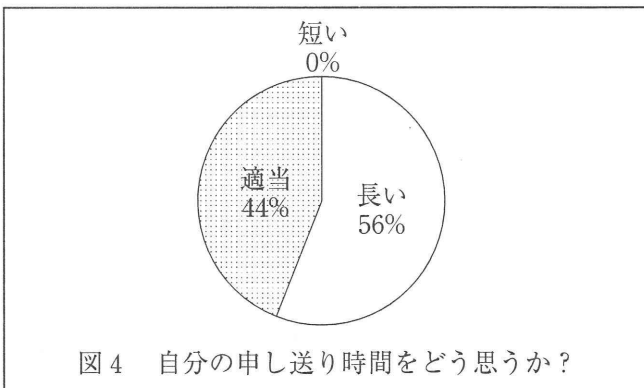
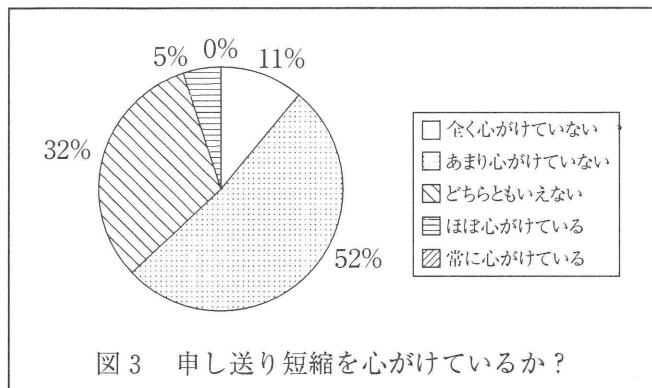


表1 申し送り短縮に賛成か？(複数解答)

はい (78%)	・仕事に早く取り組める	8人
	・記録にあることを言うのは無意味	6人
	・気持ちに余裕が持てる	2人
	・申し送り中にNSコール頻回	1人
いいえ (15%)	・自力での情報収集には限界がある	2人
	・口頭の方が安心	2人

表2 申し送り短縮によるメリット・デメリットは？(複数解答)

メリット	・ケアの充実	16人
	・Ptとの関わりがもてる	12人
	・記録の充実	7人
	・Ns自身の精神的ゆとりが持てる	7人
	・指示の見落としが減る	1人
デメリット	・Ptの状態が連休明け等把握しづらい	16人
	・口頭で送られないため不安	12人
	・記録に時間がかかる	10人
	・観察点を見逃してしまう	3人
	・記録を読む時間が無い	1人
	・精神的などは記録から得づらい	1人

勉強会后アンケート結果

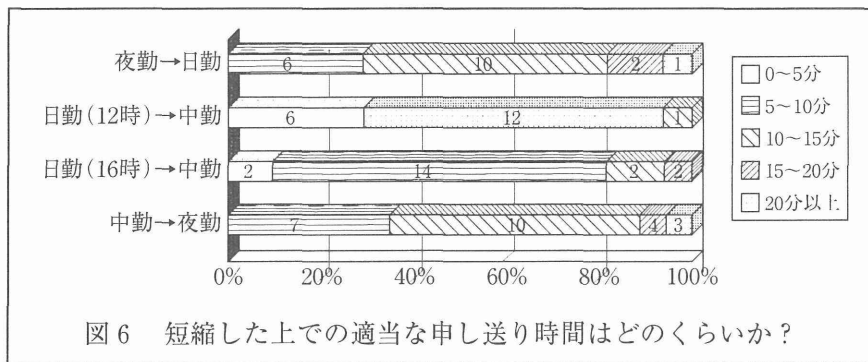


図6 短縮した上での適当な申し送り時間はどのくらいか？

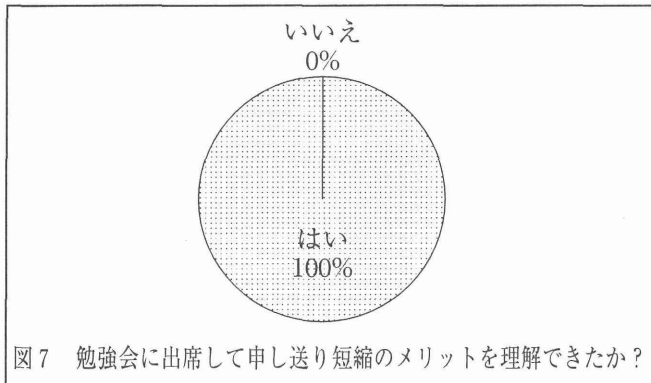


図7 勉強会に出席して申し送り短縮のメリットを理解できたか？

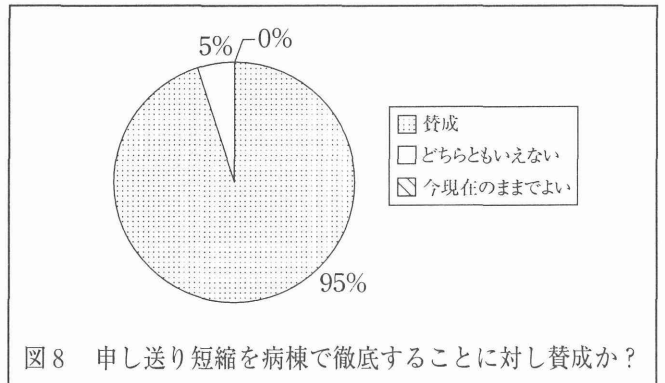


図8 申し送り短縮を病棟で徹底することに対し賛成か？

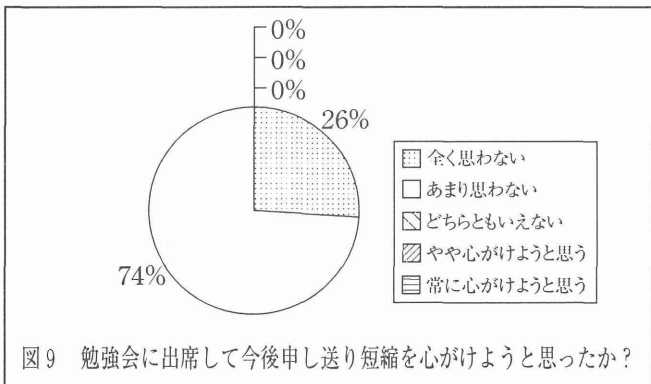


図9 勉強会に出席して今後申し送り短縮を心がけようと思ったか？

表3 どうしたら申し送り短縮行えると思うか？(複数解答)

・送る内容を決める	7人
・スタッフの意識を高める	6人
・記録の充実	4人
・記録に目を通す時間を作る	3人
・Ns間の連絡ノートを作成し情報交換の場を作る	3人
・事前に情報収集をしPtを十分に把握しておく	3人
・重症Ptを対象にして送る	1人
・カードックスを使用しない	1人
・叙述をカードックスへ入れておく	1人
・情報集収集の時間を作る	1人
・記録を書く時間を作る	1人

表4 申し送り短縮についての疑問点は？

・記録にはどの程度記せば良いか	2人
・短縮の程度	1人
・記録に時間がかかってしまうがどうするのか	1人

表5 図8の賛成理由(複数解答)

・デメリットよりメリットが多い	9人
・患者の元へ早くいける	5人
・勉強会の文献に共感	4人
・時間的にゆとりができる	2人
・無意味な内容の送りが多い	2人
・自分で判断する力がつく	2人

表6 申し送り短縮・廃止に対する意見(複数回答)

・申し送りに変わる方法を検討	9人
・勉強会の文献からも廃止に賛成	4人
・廃止は不安がある	3人
・記録を充実させれば廃止も賛成	3人
・意識を高める必要がある	3人
・短縮徹底後に廃止を望む	2人